

フーリエ変換

金谷一朗

2006年10月20日

1 ベクトル

ベクトル空間 \mathbb{V} があるとする。ベクトル空間の元、すなわちベクトルを $\mathbf{a} \in \mathbb{V}$ と書くことにする。

空でない集合 \mathbb{V} が次の性質を持つとき、これをベクトル空間（複素ベクトル空間、複素線形空間）と呼ぶ。

- 任意の $\mathbf{a}, \mathbf{b} \in \mathbb{V}$ に対して和 $\mathbf{a} + \mathbf{b} \in \mathbb{V}$ がただ一つ存在し、次の性質を満たす。
 1. 任意の $\mathbf{a}, \mathbf{b} \in \mathbb{V}$ に対して $\mathbf{a} + \mathbf{b} = \mathbf{b} + \mathbf{a}$
 2. 任意の $\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c} \in \mathbb{V}$ に対して $\mathbf{a} + (\mathbf{b} + \mathbf{c}) = (\mathbf{a} + \mathbf{b}) + \mathbf{c}$
 3. 任意の $\mathbf{a}, \mathbf{b} \in \mathbb{V}$ に対して $\mathbf{a} + \mathbf{c} = \mathbf{b}$ となる元 $\mathbf{c} \in \mathbb{V}$ が存在する
- 任意の元 $\mathbf{a} \in \mathbb{V}$ と任意の複素数 $\alpha \in \mathbb{C}$ に対して元 $\alpha \mathbf{a} \in \mathbb{V}$ がただ一つ存在し、次の性質を満たす。
 1. 任意の $\mathbf{a}, \mathbf{b} \in \mathbb{V}$ と任意の複素数 $\alpha \in \mathbb{C}$ に対して $\alpha(\mathbf{a} + \mathbf{b}) = \alpha \mathbf{a} + \alpha \mathbf{b}$
 2. 任意の $\mathbf{a} \in \mathbb{V}$ と任意の複素数 $\alpha, \beta \in \mathbb{C}$ に対して $(\alpha + \beta)\mathbf{a} = \alpha \mathbf{a} + \beta \mathbf{a}$
 3. 任意の $\mathbf{a} \in \mathbb{V}$ と任意の複素数 $\alpha, \beta \in \mathbb{C}$ に対して $(\alpha\beta)\mathbf{a} = \alpha(\beta\mathbf{a})$
 4. 任意の $\mathbf{a} \in \mathbb{V}$ に対して $1\mathbf{a} = \mathbf{a}$

\mathbf{a}, \mathbf{b} をベクトル、 α, β をスカラと呼ぶ。

2 ブラ・ケット

ベクトルには常にふたつの「表情」がある。ひとつめをブラと呼び、ふたつめをケットと呼ぶ。ふだんはブラとケットを区別しないことが多いが、これからはブラとケットを区別する。まず、ベクトル $\mathbf{a} \in \mathbb{V}$ があつたとき、対応するブラを $\langle \mathbf{a} |$ と書き、対応するケットを $|\mathbf{a}\rangle$ と書くことにする。ブラとケットは常に対として存在する。ベクトルという用語は、ブラとケットを区別しなくてよい文脈か、ブラかケットのどちらであるかが自明である文脈で用いられる。

ベクトル空間 \mathbb{V} の次元を $N \in \mathbb{N}$ (\mathbb{N} は自然数) とする。ベクトル空間 \mathbb{V} の任意の基底ケット（要するに基底ベクトル）を $|1\rangle, |2\rangle, \dots, |N\rangle$ とする。任意のケット $|\mathbf{a}\rangle \in \mathbb{V}$ は

$$|\mathbf{a}\rangle = \sum_{i=1}^N a_i |i\rangle, \quad a_i \in \mathbb{C} \quad (1)$$

で一義に決まる n 個の複素量 a_i を持つ。量 a_i をケット $|\mathbf{a}\rangle$ の成分と呼ぶ。

3 内積

ブラとケットの積—ブラケット—をベクトル \mathbf{a} とベクトル \mathbf{b} の内積とする。

ベクトル空間 \mathbb{V} の任意の元 $\mathbf{a}, \mathbf{b} \in \mathbb{V}$ に次の性質を満たす複素数 $\langle \mathbf{a}, \mathbf{b} \rangle \in \mathbb{C}$ が定義されるとき、それを内積と呼ぶ。

1. 任意の $\mathbf{a} \in \mathbb{V}$ に対して $\langle \mathbf{a}, \mathbf{a} \rangle \in \mathbb{R}$ かつ $\langle \mathbf{a}, \mathbf{a} \rangle \geq 0$. 等号成立は $\mathbf{a} = \mathbf{0}$ のときのみ.
2. 任意の $\mathbf{a}, \mathbf{b} \in \mathbb{V}$ に対して $\langle \mathbf{a}, \mathbf{b} \rangle = \langle \mathbf{b}, \mathbf{a} \rangle^*$
3. 任意の複素数 $\alpha, \beta \in \mathbb{C}$ と任意の $\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c} \in \mathbb{V}$ に対して $\langle \alpha \mathbf{a} + \beta \mathbf{b}, \mathbf{c} \rangle = \alpha \langle \mathbf{a}, \mathbf{c} \rangle + \beta \langle \mathbf{b}, \mathbf{c} \rangle$

$\langle \mathbf{a}, \mathbf{b} \rangle = 0$ のときベクトル \mathbf{a} とベクトル \mathbf{b} は直交するといひ、 $\sum_i a_i b_i = 0$ のときベクトル \mathbf{a} とベクトル \mathbf{b} は直角であるといふ。

ブラ $\langle a|$ とケット $|a\rangle$ の成分 a_i の関係を

$$\langle a| = \sum_{i=1}^N \langle i| a_i^* \quad (2)$$

と定義してみる。すると、

$$\langle a|b\rangle = \left(\sum_i \langle i| a_i^* \right) \left(\sum_j b_j |j\rangle \right) \quad (3)$$

$$= \sum_i \sum_j a_i^* b_j \langle i|j\rangle \quad (4)$$

であるから、ブラケット $\langle i|j\rangle$ の値さえどうにか決まれば、 $\langle a|b\rangle$ はベクトル \mathbf{a} とベクトル \mathbf{b} の内積の条件を満たしていることになる。そこでブラケット $\langle a|b\rangle$ をベクトル \mathbf{a} とベクトル \mathbf{b} の内積とする。

幸い、 $\langle i|j\rangle$ は任意に選ぶことができる。最もよく使われる定義は

$$\langle i|j\rangle = \delta_{ij} \quad (5)$$

である。(δ_{ij} はクロネッカーのデルタ記号である。) このとき、

$$\langle a|b\rangle = \sum_i a_i^* b_i; \quad (\langle i|j\rangle = \delta_{ij}) \quad (6)$$

である。 $\langle i|j\rangle = \delta_{ij}$ と定義することを、「座標系に正規直交座標系を選ぶ」という。また $\langle i|j\rangle$ は「計量テンソル」と呼ばれることがある。

もし $\langle i|j\rangle = \delta_{ij}$ を認めるならば

$$a_i = \langle i|a\rangle = \langle a|i\rangle^*; \quad (\langle i|j\rangle = \delta_{ij})$$

である。

内積 $\langle a|b\rangle$ は座標系に依存しない (基底ベクトルに依存しない) 量である。すなわち内積はスカラーである。そこで、一般に

$$\langle a|b\rangle = \sum_i \langle a|i\rangle \langle i|b\rangle \quad (7)$$

であるが、和記号を省略して (この省略は「アインシュタインの規約」の拡大解釈である)、

$$\langle a|b\rangle = \langle a|i\rangle \langle i|b\rangle \quad (8)$$

と書くことにしよう。上式から $\langle a|$ を取り去る。

$$|b\rangle = |i\rangle \langle i|b\rangle \quad (9)$$

上式から $|b\rangle$ も取り去る.

$$| = |i\rangle\langle i| \quad (10)$$

この関係はきわめて重要である.

4 ノルム

ベクトル (ブラでもケットでもよい) \mathbf{a} のノルムを $\|\mathbf{a}\|$ で表すことにする.

ベクトル \mathbf{a} のノルム $\|\mathbf{a}\|$ とは次の条件を満たす非負の実数のことである.

1. $\|\mathbf{a}\| \geq 0$; $\|\mathbf{a}\| = 0 \Leftrightarrow \mathbf{a} = \mathbf{0}$
2. $\|\alpha\mathbf{a}\| = |\alpha| \cdot \|\mathbf{a}\|$; $\alpha \in \mathbb{R}$
3. $\|\mathbf{a} + \mathbf{b}\| \leq \|\mathbf{a}\| + \|\mathbf{b}\|$
4. $\|\mathbf{a} + \mathbf{b}\| \leq \|\mathbf{a}\| \cdot \|\mathbf{b}\|$

ここで,

$$\|\mathbf{a}\| = \langle a|a\rangle \quad (11)$$

と定義しよう. このようにして決められた $\|\mathbf{a}\|$ はベクトル \mathbf{a} のノルムとしての役割を果たす. $|\mathbf{a}| = \sqrt{\|\mathbf{a}\|}$ はベクトルの長さ (1-ノルム) と呼ばれ, よく使われる.

後で見ると, ベクトルのノルムを不変に保つ演算を回転演算と呼ぶ.

5 線形演算子

ケット $|a\rangle \in \mathbb{V}$ がとある写像 \mathcal{T} によってケット $|b\rangle \in \mathbb{V}$ になることを,

$$\mathcal{T} : |a\rangle \mapsto |b\rangle \quad (12)$$

と書く. 特に写像 \mathcal{T} が線形写像の場合, 特別に \mathcal{T} を \hat{T} と書き, 次のように書く.

$$|b\rangle = \hat{T}|a\rangle \quad (13)$$

\hat{T} と書くのは, それが演算子であることを忘れないようにするためである. \hat{T} は線形演算子 (線形作用素) と呼ばれる.

ベクトル $\mathbf{a} \in \mathbb{V}$ に対してある操作 \hat{T} を施すとベクトル $\mathbf{b} \in \mathbb{V}$ になることを $\mathbf{b} = \hat{T}\mathbf{a}$ と表し, \hat{T} を演算子 (作用素) と呼ぶ. 演算子 \hat{T} が任意のベクトル $\mathbf{a}, \mathbf{b} \in \mathbb{V}$, 任意の複素数 $\alpha, \beta \in \mathbb{C}$ に対して

$$\hat{T}(\alpha\mathbf{a} + \beta\mathbf{b}) = \hat{T}(\alpha\mathbf{a}) + \hat{T}(\beta\mathbf{b}) = \alpha\hat{T}\mathbf{a} + \beta\hat{T}\mathbf{b}$$

を満たすとき, 演算子 \hat{T} を線形演算子と呼ぶ.

ケットについて $|b\rangle = \hat{T}|a\rangle$ のとき, 対応するブラについても

$$\langle b| = \langle a|\hat{T}^\dagger \quad (14)$$

となるような演算子 \hat{T}^\dagger を考えることができる. 恒等演算子 (つまり 1) を除けば, $\hat{T} \neq \hat{T}^\dagger$ である*1.

1 ただし $\langle i|\hat{T}^\dagger|j\rangle = \langle j|\hat{T}|i\rangle^$ である.

線形演算子 \hat{A} に対して $\hat{A}|a\rangle = \alpha|a\rangle$ を満たす $\alpha \in \mathbb{C}$ を固有値, $|a\rangle \in \mathbb{V}$ を固有ケット (固有ベクトル) と呼ぶ. 一般に固有ケットは複数個あるので, 添え字 i を使って

$$\hat{A}|a_i\rangle = \alpha_i|a_i\rangle \quad (15)$$

と書くことがある.

演算子, 固有値, 固有ベクトルに別々の文字を割り当てる必要はない. 例えば, 演算子 \hat{A} の固有値を A , 固有ベクトルを $|A\rangle$ とすれば $\hat{A}|A\rangle = A|A\rangle$ と書ける. この表記法は, 演算子 \hat{A} が, 演算子 \hat{A} の固有空間では単なる数値 (または対角行列) になる (例えば伝達関数はその固有空間である波数領域では対角化される) ことを明示している.

6 回転演算子

線形演算子 \hat{T} によってケット $|a\rangle$ が $|b\rangle$ に変換されるとする. このとき, $\|a\| = \|b\|$ であるならば (すなわち $\langle a|a\rangle = \langle b|b\rangle$ であるならば), 線形演算子 \hat{T} は特別に回転演算子と呼ばれる.

いま,

$$|b\rangle = \hat{T}|a\rangle \quad (16)$$

とする. 内積 $\langle b|b\rangle$ は

$$\langle b|b\rangle = \langle a|\hat{T}^\dagger\hat{T}|a\rangle \quad (17)$$

$$= \hat{T}^\dagger\hat{T}\langle a|a\rangle \quad (18)$$

であり, 回転演算の条件は $\langle a|a\rangle = \langle b|b\rangle$ であったから, 回転演算子 \hat{T} と, 対になる回転演算子 \hat{T}^\dagger の関係は

$$\hat{T}^\dagger\hat{T} = 1 \quad (19)$$

でなければならない. すなわち, 回転演算子 \hat{T} は

$$\hat{T}^\dagger = \hat{T}^{-1} \quad (20)$$

でなければならない. 上式の関係を満たす演算子はユニタリ演算子とも呼ばれる.

7 フーリエ変換

状態 (状態ベクトル) f を独立変数 x で表すことを,

$$\langle x|f\rangle \quad (21)$$

と書く (複素量 $\langle x|f\rangle$ はしばしば $f(x)$ と書かれる).

複素量 $\langle x|f\rangle$ とは, 状態 $|f\rangle$ を基底ベクトル $\langle 1|, \langle 2|, \dots, \langle x|, \dots, \langle N|$ で展開したときの係数である.

状態 f は以下の操作によって異なる独立変数 k で表示することができる.

$$\langle k|f\rangle = \langle k|x\rangle\langle x|f\rangle \quad (22)$$

ここに, 関係 $|\cdot\rangle\langle x|$ を用いた.

拡大解釈したアインシュタインの規約に基づいて、本稿では $|x\rangle\langle x|$ のように同じ変数 x が2回登場したときは変数 x について積分

$$\int_{-\infty}^{\infty} |x\rangle\langle x| dx$$

をとるものと約束する。式 (22) は

$$\langle k|f\rangle = \int_{-\infty}^{\infty} \langle k|x\rangle\langle x|f\rangle dx$$

を簡略化して表記したものである。

1次元フーリエ変換は、基底ベクトル $\langle x|$ として空間（時間）領域 $-\infty < \xi < \infty$ における位置 $\xi = x$ のインパルスすなわち $\langle \xi|x\rangle = \delta(\xi - x)$ を、基底ベクトル $\langle k|$ として空間（時間）領域全体にわたり振幅が一定で波数が k の波すなわち $\langle \xi|k\rangle = \exp(2\pi i k \xi)$ を仮定する。故に

$$\langle x|k\rangle = \langle x|\xi\rangle\langle \xi|k\rangle \quad (23)$$

$$= \int_{-\infty}^{\infty} \langle \xi|x\rangle^* \langle \xi|k\rangle d\xi \quad (24)$$

$$= \int_{-\infty}^{\infty} \delta(\xi - x) \exp(2\pi i k \xi) d\xi \quad (25)$$

$$= \exp(2\pi i k x) \quad (26)$$

である。

1次元フーリエ変換は次のように具象化できる。

$$f(k) = \langle k|f\rangle \quad (27)$$

$$= \langle k|x\rangle\langle x|f\rangle \quad (28)$$

$$= \int_{-\infty}^{\infty} \langle x|k\rangle^* \langle x|f\rangle dx \quad (29)$$

$$= \int_{-\infty}^{\infty} \exp(-2\pi i k x) f(x) dx \quad (30)$$

線形演算子 \hat{T} によって、ケット $|f\rangle$ が

$$|g\rangle = \hat{T}|f\rangle \quad (31)$$

という変換を受けるとする。ところが、演算子 \hat{T} の固有ベクトルが $|k\rangle$ であったとしよう。すなわち

$$\hat{T}|k\rangle = T_k|k\rangle \quad (32)$$

であるとする。このとき、

$$|g\rangle = \hat{T}|f\rangle \quad (33)$$

$$= \hat{T}|k\rangle\langle k|f\rangle \quad (34)$$

$$= T_k|k\rangle\langle k|f\rangle \quad (35)$$

と変形できる。

工学の問題では、

$$|g\rangle = \hat{T}|x\rangle\langle x|f\rangle \quad (36)$$

を解きたい場合が数多くある。この問題は、上式を次のように変形すれば容易に解ける。

$$|g\rangle = \hat{T}|k\rangle\langle k|f\rangle \quad (37)$$

$$= T_k|k\rangle\langle k|f\rangle \quad (38)$$

8 2次元フーリエ変換

状態 f がふたつの独立変数 x, y で表されることを

$$\langle x, y | f \rangle \quad (39)$$

と書く。表示 $\langle k, l | f \rangle$ は次式で求められる。

$$\langle k, l | f \rangle = \langle k, l | x, y \rangle \langle x, y | f \rangle \quad (40)$$

2次元フーリエ変換では、独立変数 x, y と k, l の間に次の関係を要求する。

$$\langle k, l | x, y \rangle = \exp(-ikx) \exp(-ily) \quad (41)$$

2次元フーリエ変換は次のように具象化できる。

$$f(k, l) = \langle k, l | f \rangle \quad (42)$$

$$= \langle k, l | x, y \rangle \langle x, y | f \rangle \quad (43)$$

$$= \iint_{-\infty}^{\infty} \langle k, l | x, y \rangle \langle x, y | f \rangle dx dy \quad (44)$$

$$= \iint_{-\infty}^{\infty} \exp(-ikx) \exp(-ily) f(x, y) dx dy \quad (45)$$

9 球面調和変換

状態 f が（平面ではなく）球面上のふたつの独立変数 θ, ϕ によって表されることを

$$\langle \theta, \phi | f \rangle \quad (46)$$

と書く。表示 $\langle k, m | f \rangle$ は次式で求められる。

$$\langle k, m | f \rangle = \langle k, m | \theta, \phi \rangle \langle \theta, \phi | f \rangle \quad (47)$$

ただし、変数 θ, ϕ は球面上にあるので、積分に気をつけなければならない。

積分は次のようになる。球面上の変数 θ を天頂角（ゼニス）、 ϕ を方位角（アジマス）とすると、

$$|\theta, \phi\rangle \langle \theta, \phi| = \int_0^{2\pi} \int_0^\pi |\theta, \phi\rangle \langle \theta, \phi| d\theta \wedge d\phi = \int_0^{2\pi} \int_0^\pi |\theta, \phi\rangle \langle \theta, \phi| \sin\theta d\theta d\phi$$

である。

球面調和変換では、天頂角 θ 、方位角 ϕ 、次数 k 、位相 m の球面調和関数を $Y_{km}(\theta, \phi)$ とすると

$$\langle k, m | \theta, \phi \rangle = Y_{km}(\theta, \phi) \quad (48)$$

である。ただし、

$$0 \leq \theta < 2\pi, 0 \leq \phi < \pi \quad (49)$$

であり、

$$k, m \in \mathbb{Z} \quad \text{and} \quad 0 \leq k, -m \leq k \leq m \quad (50)$$

である。（積分区間が有限であるため、変数 k, m は離散値をとる。これはフーリエ級数展開と同じ事情である。）

付録 A 量子力学とフーリエ変換

量子力学によれば、物理量とは物理量作用素（演算子）の固有値のことである。そこで、位置 x 、波数 k に対応する作用素として、位置作用素 \hat{x} 、波数作用素 \hat{k} を考える。ここに量子力学では

$$[\hat{x}, \hat{k}] = i$$

を要求する。

作用素 \hat{x} の固有ベクトルを基底ベクトルにとると

$$\hat{x} = x$$

である。（作用素 \hat{x} の基底ベクトルはインパルスで、固有値は連続値をとる。）このとき

$$\hat{k} = -i \frac{\partial}{\partial x}$$

である。これは次のようにして確認できる。

$$\begin{aligned} [\hat{x}, \hat{k}] \psi(x) &= -i \left(x \frac{\partial}{\partial x} - \frac{\partial}{\partial x} x \right) \psi(x) \\ &= -i \left(x \frac{\partial}{\partial x} \psi(x) - \frac{\partial}{\partial x} x \psi(x) \right) \\ &= -i \left(x \frac{\partial}{\partial x} \psi(x) - \left(\psi(x) + x \frac{\partial}{\partial x} \psi(x) \right) \right) \\ &= i \psi(x) \end{aligned}$$

ここで

$$\hat{k} \langle x|k \rangle = \langle x|\hat{k}|k \rangle = \langle x|k|k \rangle = k \langle x|k \rangle$$

ゆえ微分方程式

$$\hat{k} \langle x|k \rangle = k \langle x|k \rangle$$

または同じ意味の

$$-i(\partial/\partial x) \langle x|k \rangle = k \langle x|k \rangle$$

を解いて

$$\langle x|k \rangle = \exp(2\pi i k x)$$

を得る。